

刑務所と地域の連携および文化的多様性への配慮

—カナダ連邦刑務所およびオンタリオ州刑務所の事例から¹⁾²⁾—

上 瀬 由美子 (立正大学心理学部)

Linkage with the community and reasonable accommodation for cultural diversity in prison: The case of institutions of Correctional Service Canada and a correctional facility in Ontario

Yumiko KAMISE (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Abstract

The extended social offender reintegration program in Canada involves the nearby community and incorporates its intervention into their initiatives. In addition, Correctional Service Canada (CSC) is developing reasonable accommodation for ethnocultural offenders. I have studied five correctional institutions of CSC and one facility run by the provincial government in Ontario and interviewed the people involved. In this article, I described the current situations of their relationships with their community and approaches to the cultural diversity of the offenders. In the conclusion, I have discussed the effect of correctional facilities' efforts to collaborate with the community from the contact hypothesis theory.

Key words : prevention of reoffending, social inclusion and reintegration, contact hypothesis theory

問 題

日本では2016年、再犯防止に対する社会的関心の高まりを背景に「再犯防止推進法」(再犯の防止等の推進に関する法律 平成28年法律第104号)が成立し、施行された。これにより、国だけでなく地方や民間も、再犯防止の担い手としてその役割を期待されることとなった。この法律の中では、再犯防止の働きかけが機能するためには、国民の理解と地域社会の協力という基盤が不可欠と位置付けられている。本稿では、再犯防止の取り組みに向けて地域との連携が進むカナダの刑務所の事例に焦点を当て、現地施設の見学と関係者への聞き取り調査をもとに現状を報告する。

刑務所と地域の共生

従来、刑務所と地域の関わりについての問題は、住民の抵抗感・不安感への対応といった側面、あるいは施設開設による経済効果や地域活性化といった側面から議論されることが多かった。これに対し近年、地域と刑務所の共生は、単に「その地域と行政との経済的な共存」という枠組みを超える大きな意味をもつことが指摘されはじめている。例えば上瀬・高橋・矢野(2016)は、PFI刑務所近隣住民へ意識調査を実施し、住民が近隣の刑務所施設に対して直接的・間接的な形で接触することが、施設に対する抵抗感を低めたり、

出所者全体に対する受容的な態度に結びつくことを指摘している。この研究知見は、刑務所と地域の積極的な共生が、入所者の社会復帰を支え再犯防止を促進させるために有効であることを示唆するものである。

これまで日本の刑務所は閉じられた社会として存在し、その密行主義的な側面が、施設に対する否定的イメージにつながっていた(西田, 2012)。近年PFI刑務所の新しい取り組みや、地域との連携に関心が向けられるようになったが(法務総合研究所, 2017)、刑務所と地域の一般住民との関わりは限定されている。再犯防止促進法では「国民の理解と地域社会の協力」が求められており、刑務所が再犯防止のスタート地点にあることを考えれば、施設と地域社会との共生の推進、すなわち双方が問題解決に向けて積極的に協力しあう「連携」も次の段階では重要となってくる。

海外に目を移すと、刑務所と地域との連携は必ずしも珍しいことではない。例えばカナダでは、入所者がいずれ社会に再統合されていくことを前提とし、刑務所あるいは中間処遇施設において、地域のボランティアが参加するしくみが作られている(上瀬, 2019)。このカナダの取り組みは、日本の再犯防止推進法が掲げている「地域社会の協力」が具体化された形のひとつと位置づけられるため、その効果や課題を知ることは日本の矯正システムが進むべき方向を議論する上で有効と考える。ただし、カナダにおける刑務所と地域の

連携の現状は日本では十分に知られていない。そこで本稿では、カナダ連邦および州が運営する矯正施設で具体的にどのような形で地域との連携が図られているのか、その現状を現地施設の見学と関係者への聞き取りによって明らかにすることを第1の目的とする。

刑務所における文化的多様性への配慮

現在日本では、外国人入所者のうち、日本人と異なる処遇を必要とするものはF指標受刑者と呼ばれ、その指導は個々の犯罪傾向の進捗、資質、環境等に応じて個別に判断されている。ただ、全体としては、日本社会に適應するための特別な改善指導はほとんど行われていないことが問題とされ、彼らの社会復帰に向けて日本語能力の向上を含めた指導の必要性が指摘されている(法務総合研究所, 2014)。

翻って、カナダは1971年に世界で初めて国策として「多文化主義政策」を打ち出し、現在も積極的に移民を受けている。カナダに住む人々のうちおよそ5人にひとりが外国生まれである(Statistics Canada, 2017)。またカナダでは、ヨーロッパ人が到来する前から先住民の人々(Indigenes)が住んでおり、現在でもそれぞれが固有の文化を守って生活している(浅井, 2004)。このような文化的多様性は、刑務所において入所者の文化的多様性となって現れており(Gottschall, 2012)、入所者の文化的多様性に配慮した処遇が工夫されている(上瀬, 2019)。中でも先住民については、心理的・社会的な苦境から、矯正保護下にある先住民の割合が人口比に対して高いことが課題となっている(Statistics Canada, 2018)。そのためカナダ矯正局では、先住民入所者への処遇や出所時支援について個別の制度を制定している。カナダの先住民問題は当国の歴史を背景に生じたものであるが、入所者の多様性に配慮した処遇の例として全体を捉えるなら、日本の矯正施設でも今後検討すべき方向のひとつと理解できる。そこで本研究では、カナダ連邦および州が運営する矯正施設において、文化的多様性に配慮した社会復帰支援のあり方について具体的な運用を明らかにすることを第2の目的とする。

以上2つの目的をふまえ、本研究ではカナダの連邦刑務所、州刑務所、および社会復帰のための中間処遇施設を訪問して施設や運営状況を把握し、さらに職員、入所者、施設でボランティアを行う人々など関係者に聞き取り調査を行うこととした。

方法

調査手続き

カナダの刑務所は、連邦刑務所と州刑務所に大別され、州刑務所の処遇は州によって異なっている。本研

究ではまず都市としてカナダにおいて人口が最も大きいトロント(オンタリオ州)と、トロントに次いで英語圏の中で人口が大きいバンクーバー(ブリティッシュ・コロンビア州)に注目し、両都市の近郊にある連邦刑務所と州刑務所および関連施設への見学について、日本の法務省を通じて依頼をした。その結果、6つの施設への見学が認められ、本研究ではこれらの施設の見学および関係者への聞き取り調査を行った。

施設は、カナダ矯正局(Correctional Service Canada以下CSC)が管轄する連邦刑務所から、コリンズ・ベイ刑務所(Collins Bay Institution オンタリオ州キングストンに位置; セキュリティレベル⁴⁾はマキシムム、ミディアム、ミニマム; 収容定員760人)、ミッション刑務所(Mission Institution ブリティッシュ・コロンビア州ミッションに位置; セキュリティレベルはミディアム、ミニマム; 収容定員540人)、フレイザー・バリー女子刑務所(Fraser Valley Institution for Women ブリティッシュ・コロンビア州アボッツフォードに位置; セキュリティレベルはマキシムム、ミディアム、ミニマム; 収容定員112人)の3施設が対象となった。州刑務所からは、オンタリオ州が管轄するトロント・サウス・ディテンション・センター(Toronto South Detention Centre オンタリオ州トロントに位置; セキュリティレベルはマキシムム、ミディアム; 収容定員1650人)の1施設が対象となった。中間処遇施設からは、CSCが管轄する地域矯正センター(コレクショナル・コミュニティ・センター)の中から、ヘンリー・トレイル・コミュニティ・コレクショナル・センター(Henly Trail Community Correctional Centre (以下ヘンリー・トレイルCCC) オンタリオ州キングストンに位置; 収容定員40人)と、チリワック・コミュニティ・コレクショナル・センター(Chilliwack Community Correctional Centre (以下チリワックCCC) ブリティッシュ・コロンビア州チリワックに位置; 収容定員31人)の2施設が対象となった。

見学および聞き取り調査実施にあたっては事前に、研究の目的および当日説明してほしい事柄について各施設に質問票を送り、見学の中でその回答を得るよう依頼した。施設の中で見学する場所、話を聞く相手、見学の流れなどについては、調査者側の依頼をふまえて施設側が決定した。このため、施設ごとに立ち入り許可された場所や、聞き取り対象者は異なっていた。聞き取りの形式は、半構造化面接形式である。

調査項目

本研究の目的をふまえ、見学および聞き取り調査については以下の3点に焦点をあて、事前に送付した質問票においても以下を明らかにすることを研究の目的

として施設側に伝えた。

1. 施設と地域の関わり方：各施設において、ボランティアや地域代表者との関係がどのように築かれているかを把握する。
2. 文化的多様性への配慮：多文化社会を考慮した処遇、先住民文化に配慮した処遇やプログラムについて把握する。
3. 個々の施設における、設備やプログラムの特徴：各施設において、入所者の社会復帰や出所後の社会的統合に向けて行なわれている具体例な試みについて把握する。

結果

見学および聞き取りの結果を以下に記す。前述のように、見学先ごとに立ち入りが可能とされた場所や、聞き取りができた対象者は異なっているため、各施設の状況を正確に比較検討することは難しい。このため結果は、施設と地域の関わり方や文化的多様性の状況について、見学と聞き取りの中で把握できた事柄を抜き出す形で全体として記述した。また、各施設の設備やプログラムの特徴については、地域との連携に関する部分について特に目立った点に限定して記述した。

コリンズ・ベイ刑務所（連邦刑務所）

(1) 見学の流れ

2018年7月、各施設を見学するとともに、職員9名、ボランティア5名、入所者5名に聞き取りを行った。聞き取りは各施設のミーティング・ルームの他、施設内を見学しながら行った。

(2) 施設やプログラムの特色

家族と3日間宿泊できる家族棟があり、職員から「申請は全員ができるが、全員が認められるわけではない。社会復帰のために家族との絆を入所中にも維持することが重要なので、リスクはあるが許可している」との説明があった。また当刑務所では、改善指導にかかわるプログラムとして「ブック・クラブ」を設置しており、関係者の手によって関連の本が出版されている(Heathcote, 2015; Walmsle, 2015=2016)。3つのセキュリティ施設ごとにブック・クラブがあり、それぞれに3~4名のボランティアがファシリテーターとしてディスカッションにかかわっていた。入所者参加者の中からアンバサダーが選ばれ、他の入所者への参加呼びかけや取りまとめが行なわれていた。

当施設は、建物以外の土地には広々とした草原や湿地が広がっており、敷地の一部を利用して入所者が農作物を育て、収穫物をフードバンクに寄付する活動が行われていた。職員からは「トロントでは所得の低い人が新鮮な野菜を食べられないため、喜ばれている」

と説明があった。当日も農場ではセキュリティレベルの低い入所者2名が、ボランティアの付き添いがあるだけの自由度の高い環境で農作業を行っていた。逃走等のリスクとの兼ね合いについて職員に質問したところ、次のような回答があった。「punishmentとreintegrateのバランスを考慮してこのような形になっている。厳しい警備のない屋外で作業をすることは逃走のリスクも含んでいる。しかし、その一方で入所者自ら農作業に参加しフードバンクへの寄付を通して自身が社会に役立っていると感じられること、あるいは作業を通じて気持ちが安定していくことは、今後の社会復帰の礎となる。そのためにも入所者の逃走リスクや再犯危険性を的確に評価し、コミュニティへの安全を脅かす恐れのある入所者には厳重な警備をつけるなど、セキュリティレベルでの振り分けを適切に実施することが大切である。」

(3) 施設と地域との関わり

ボランティアブック・クラブについてはボランティアおよび関係職員に聞き取りを行い、以下の回答があった。「ブック・クラブには、ボランティア希望者が多く、近隣住民以外からも問い合わせがある。当施設ブック・クラブでは外部団体がボランティアを組織化し、スクリーニングおよびファシリテーターのトレーニングを行なっている。仮出所した人のサポートも行っている。」聞き取りを行ったボランティアたちからは、この活動から自分たちが得るものが大きいとの意見が出された。具体的な感想として「(刑務所の外の)一般のブック・クラブは社交クラブの要素が強いが、ここでは皆が真剣に参加している」「話し合いがとても深い」「刑務所の中での議論は非常に正直でクリエイティブであることに感銘を受けた」などが語られた。

農作業支援のボランティアについては、夏休みで参加しているという大学生から話を聞いた。このボランティアは「自分は、近隣の大学で犯罪学を専攻している。母親がフード・バンクの活動に関わっていたことから、刑務所でのボランティアに興味をもった。将来は警察官など人を助ける仕事をしたいと考えている。ここでの活動が勉強になるので夏休みに参加している」と話した。

市民諮問委員会 (Citizen Advisory Committees :

CAC) 市民諮問委員会は、CSCが地域との共生のために実施している仕組みで、近隣から代表者が選ばれて委員となり、刑務所の監査をし、地域の意見を提言する役割を担うものである(上瀬, 2019)。当日話を聞いた委員からは「委員は基本的には刑務所のどのような場所にでも自由に出入りし、入所者と話ができる。当施設の委員は5名で、委員長は心理学者(大学教授)で、他に元高校教師や元エンジニアなどから構成され、

全員が刑務所近隣地域に住んでいる。月に複数回ミーティングがあり、そのほかに自身で個別に施設を訪問している」とのことであった。委員にこのシステムに対する課題をたずねたところ、「自分たちの権限には限界があるのが難しい所である。委員は施設に提言できても、実際に運営を変えるところまでは力は及ばないのがもどかしい」との意見が出された。さらに「新聞や雑誌などメディアは刑務所の様子をセンセーショナルに書きたてやすい傾向があり、報道が実態に沿っていない部分がある。このため自分は施設の中の様子を外の人（地域の人）に正確に伝えることを心がけている」と話があった。

(4) 文化的多様性への配慮

当施設にはチャペルがあり、2名のチャプレン（プロテスタントとカソリック）がいる。職員からは「各宗教に対応できるよう外部のチャプレンとも連携している。例えばシーク教徒は本施設に現在6人しかいないが、月に一度は彼らのためのチャプレンが呼ばれる。当施設では、必要に応じてラマダンなど宗教に合わせた食事スタイルが提供され、宗教や習慣に対応した食事（ハラルやベジタリアン用）も提供されている」と説明があった。

また先住民入所者が作業するための部屋がいくつかあり、中央の部屋には宗教的儀式の際に使われる祭壇や方角を示す絵が壁にかけられていた。担当職員からは「先住民に対しては、週に2回、宗教的儀式や特別な教育プログラムが実施されている。季節の変わり目には、文化に沿った儀式が行われ、その時はエルダー（文化的・宗教的指導者）が訪問し、伝統的に食されている野生の動物が食事として提供される」と説明をうけた。

当施設では、英語が第二外国語である入所者のために読み書き（英語）のクラスが開催されており、ここでは英語を第二言語として習得した入所者がアシスタントを務めていた。

ミッション刑務所（連邦刑務所）

(1) 見学の流れ

2018年7月、各施設を見学するとともに、職員8名に聞き取りを行った。聞き取りは各施設のミーティング・ルームの他、施設内を見学しながら行った。

(2) 施設やプログラムの特色

ミニマム・セキュリティでは、大規模な農作業が行なわれていた。この農場について職員から以下の説明があった。「当施設では外部のボランティア団体の支援のもと、プロダクションガーデン（生産農園）が運営され、入所者が働き手となっている。この農作業プロジェクトは10～12年前に始められたもので、昨年は野

菜や果物、合わせて17トンも収穫があった。収穫物はスクール・バンクに寄付している。」

(3) 施設と地域とのかかわり

ボランティアにより農作業の指導のほか、地域とのかかわりとしては、入所者が、先住民のコミュニティのためにブランケットや家具を作る活動をしていると説明があった。ここで生産したものは一般に販売できないため、学校やホームレス支援のために寄付されている。

(4) 文化的多様性への配慮

ミニマム施設では、建物の外の広大な敷地の一部に大きな木々に囲まれた広々とした円形の土地があった。そこにはティーピー（宗教的儀式用のテント）用の平らな空間があり、これは最近整備されたものであった。また近くにはスウェットロッジ（宗教的儀式用の施設）用の空間もあった。職員から「当施設における先住民入所者の割合は、ミニマム施設とメディアム施設で若干差があり、メディアムの方がやや多い。先住民入所者に対しては特別なプログラムが準備されている」との説明をうけた。

メディアム施設の中で、先住民の処遇のための専門の職員である、「エルダー」（入所者に対し、カウンセリング、教育、宗教的儀式を実施するスピリチュアルなリーダー）および「アボリジナル・リエゾン・オフィサー」（先住民の社会復帰に関して地域との連携を支援する）から話を聞いた。エルダーは「週5日のフルタイムでこの施設に勤務している。入所者の話を聞くほかに、宗教的儀式の実施と準備を行なう」と話した。また、アボリジナル・リエゾン・オフィサーからは以下の話があった。「当施設のプログラムは、ヒーリングにフォーカスしている。先住民入所者にはトラウマをかかえた人が多いので、まずはヒーリングすることが優先される。非常に暴力的な環境で育った人に、非暴力を学んでもらうためには、多くのカウンセリングが必要である。当施設の大きな役割は、先住民入所者が出所後に彼らもどる地元で支援をうけられるように繋げることにある。施設の外には、コミュニティ・アボリジナル・リエゾンオフィサーがおり、そこが出所者の支援を引き継ぐ形になる。具体的な支援としては、居住場所の確保、言語のサポート、カウンセリングなどである。宗教的指導者についても、BC州には、エルダーネットワークがあり、出所後は地元のエルダーに支援を引き継ぐことができる形になっている。ただ、当施設のエルダーとの信頼関係が深い場合には、出所後もそのエルダーが相談に呼ばれることもある。」他の職員からは、「先住民入所者に対する当施設の支援は当事者から評判が良い」との話があった。

フレイザー・バリー女子刑務所（連邦女子刑務所）

(1) 見学の流れ

2018年7月、各施設を見学するとともに、職員2名に聞き取りを行った。聞き取りは主としてミーティング・ルームで行い、施設内を歩きながら補足説明をうけた。

(2) 施設やプログラムの特色

収容定員が112名余りであるところ、職員数は175人と多い。CSCには女子入所者への処遇に関する規則として「ジェンダー・プロトコル」がある（CSC, 2018）。これに基づき、所内で性的アブユーズが起こらないように配慮されていると職員から説明があった（配慮の例：夜10時以降に男性職員は残れない、身体検査は必ず女性職員が行う）。また、乳幼児をもつ入所者については、子どもが5歳になるまではここで育てることができるという説明があった。入所者をコミュニティに出せるか刑務所の中においておくかは、「コミュニティセーフティの観点から判断される」とのことであったが、職員からは「少しでも外に出るチャンスをあげたいと考えている」との発言が聞かれた。刑務所の外で活動をする際、最初は職員が警備を担当するが、2～3回繰り返して問題が起こらなければ、ボランティアによる付き添いにも説明を受けた。見学および聞き取り全体を通して、男子刑務所と比較して細やかな対応がなされている様子がうかがわれた。

(3) 施設と地域との関わり

ボランティア 職員から収容定員（112名）を大幅に超える「およそ200人のボランティアが支援に関わっている」と説明があり、その活動内容は以下のものであった。「ボランティアは近隣地域（フレイザー・バリー・エリア）に住む人が大半であるが、離れたバンクーバーから来ている人もいます。ボランティアは地域への送り迎え、ブック・クラブの参加、アクティビティの提供（ヨガ、音楽、ソーイングなど）の支援等を行う。ウーマン・トゥー・ウーマンというサポート団体があり、入所者の話し相手になっている。集団アクティビティの社会貢献プログラムとして、男性刑務所で生産された毛布のあまりを使って、ソーイングをし、ホームレスの人に渡すためのブランケットを作成している。」

犬舎 2006年から、「ペットホテル」「犬の美容室」「犬の訓練」の3つのサービスを行なう犬舎がスタートしている。当日は犬舎を見学するとともに、その取りまとめを行う職員に聞き取りを行った。聞き取りの内容は以下の通りである。「8～10名の女子入所者が3つのシフトを組んで働いている。顧客は主として地元住民で、利用者の評判は良い。この施設は入所者の職業訓練の場にもなっていて、犬舎スタッフの資格取得→トリマー・アシスタントの資格取得→トリマーの資格取

得の順でスキルアップをしている。資格取得が出所後に役立っているのかについては、統計はないため正確なところはわからない。しかし出所者から電話がかかってきて報告をうけることがあり、中には自分でペットホテルビジネスを始めた人もいて、手応えは感じている。この犬舎で習うスキルは、ペット関連に限定されない。時間通りに犬舎に働きに来る、犬を預けに来た地元住民（顧客）に対応するなどが、基本的な職業訓練になっている。実際の社会と接触する形で社会復帰に備えることが、出所後の社会への再統合（reintegration）に役立つ。」

(4) 文化的多様性への反映

サンクチュアリという名前がついた部屋があり、全ての宗教行事に使える空間として利用されていた。フルタイムのチャプレンがひとり、そのほか先住民入所者のために働くエルダーが3人いると説明があった。先住民入所者への対応については以下の話があった。「昨年入った入所者のうち、27%が先住民であった。3つのセキュリティレベルごとに、先住民入所者用のユニットがあり、その中で入所者は共同生活をしている。同様に全レベルに、それぞれ先住民入所者用のロッジ（宗教的儀式のための小屋）がある。」

トロント・サウス・ディテンションセンター（オンタリオ州刑務所）

(1) 見学の流れ

2018年7月、2日間にわたり施設内を見学するとともに、職員12名、施設関係者1名、入所者3名に聞き取りを行った。聞き取りについては主に会議室にて行ったが、施設内を見学する間にも話をきいた。

(2) 施設やプログラムの特色

当施設はマキシマム・セキュリティレベルの建物と、ミディアム・セキュリティレベルの建物の2つに大別されている。マキシマム・セキュリティレベルの建物の収容定員（capacity）は1650名で、カナダで2番目に大きな刑務所である。2年未満の刑期の受刑者を収容する州施設であると同時に、裁判を待つものの拘置所としても機能している。ミディアム・セキュリティレベルの建物は、Toronto Intermittent Centre (TIC) とよばれ、定員320名の中間処遇施設（受刑者が仮釈放の時期に週末だけ戻るなど）として機能している。

プログラム 職員から当施設のプログラムについて次のような説明があった。「本施設ではリテラシー（読み書き能力）プログラムに力を入れていて、人気があるものについては順番待ちになっている。義務教育を十分終えていない初歩の人に対しては、識字レベルが上がるようリテラルチェンジ（CSC, 2015）を指導する。高校を卒業していない人については、何単位足りない

のか等を把握し、あと数単位ということであれば、NPOの団体（例：Amadeusz）等と協力して中でプログラムを実施して単位を取得させるようにする。単位が大幅に残っているようなら、対応のプログラムを受けてGED（高校卒業認定資格）をとるように勧める。また、オンラインで大学（Athabasca University）の授業を受講し単位を取得することも可能である。州刑務所に入る受刑者の刑期は2年以下であり、仮釈放を考慮すると16ヶ月未満で多くの人は外の社会に戻る形になる。刑務所の中にいるのはこのように短い期間ではあるが、当刑務所では出所してからも中で受けたプログラムの効果が継続するよう工夫している。」

施設のノーマライゼーション 当施設は全体として自然光が入る明るい作りになっていた。職員からは、「入所者のためでもあるが、重視されているのはスタッフのメンタルヘルスである。入所者は順次入れ替わるが、職員は30年務めるような場合もある。外の社会と同じような環境に近づけることが、職員のために必要だ」との話があった。

(3) 施設と地域の関わり

ボランティア ボランティアについて関係職員から次のような説明があった。「ボランティアはリタイアした人や学生など年代も背景も様々な人が応募していて、性差はほとんどない。多くが近隣の住宅街に住んでいる。ボランティアが重要なのは、彼らが処遇の専門家ではなく、入所者が共感をもてるような一般の人々だからである。彼らは入所者のロールモデルになる。また当施設には薬物販売の罪での入所者を対象にした『ディーラーズ・アノニマス』というプログラムがある。ボランティアとして関わるのは元ディーラーで、どのようにして犯罪と関わりを断つかなど、彼らの体験に基づく実践的な話をする事ができる。」

カナダでは、ジョン・ハワード・ソサエティ（John Howard Society）、エリザベス・フライ・ソサエティ（Elizabeth Fry Societies）という二つの大きなNPOが、入所者の社会復帰の過程で大きな役割を担っている。職員から「当施設ではこの2つの他にも、活動を支える民間の基金があり、その中には音楽系の組織（例：The Robb Nash Project）など様々なものがある。またトロント公共図書館とのパートナーシップをとっていて、そこから職員が1名、週に28時間勤務で派遣されている。図書室の本もこの図書館から譲渡されている」との説明があった。

ボランティアについては以下の説明があった。「ボランティアは、関心のある人自身が、申請書にレジュメをつけて申し込みをする。その後、面接を行い、前歴のチェックなどを行う。ただし犯罪歴があっても、一定期間問題がなければ、受け入れる場合もある。むし

ろ薬物関係の入所者に対しては、以前薬物関係で刑務所に入っていたが現在は立ち直っている人がロールモデルになることもある。その後で、オリエンテーションや、施設見学体験を実施し、向いていない人を除く。」職員からは他に「刑務所施設は一般社会とは感覚がずれてしまいやすいので、施設のあり方や職員の感覚が一般社会と大きく乖離しないように、一般社会の感覚をもつボランティアの役割は、前述の施設のノーマライゼーションにも重要である」と意見が出された。

市民諮問委員会（Community Advisory Boards：CAB） オンタリオ州刑務所にも、連邦刑務所の市民諮問委員会に対応する委員会（CAB）がある。CABは、オンタリオ州の地域安全矯正保護省（Ministry of Community Safety and Correctional Services）が、地域と関連機関との連携を強化するために開設している独立機関である。地域の側から、矯正施設の運営のすべての側面について、行政に対して助言と勧告を行うことを目的としている。CAB委員は、施設のすべてのエリアにいつでもアクセスでき、入所者とも話ができて、全ての記録を見ることができ（Toronto South Detention Centre, 2017）。

(4) 文化的多様性への配慮

職員からは以下の説明があった。「宗教的活動に関するボランティアが120人いる。宗教への配慮については、オンタリオ州の方針に従っている。ラマダンなど特定の宗教への配慮も予算に入っていて、この予算の中で料理をするなど文化的多様性に対応している。本施設では、入所者150人のうち、10%の人がムスリムである。」

また先住民入所者に対応については、以下の説明があった「担当のスタッフは19人おり、このうち4人は先住民の人である。その他に3人のボランティアがかかわっている。当施設では先住民ユニットが特別にあり、ここに入るのはカナダ先住民に限定されている。このユニットの目的は、文化の継承ではなく、先住民に文化や慣習を安心して実践できる場所を提供することにある。プログラムは、カナダ真実和解委員会（Truth and Reconciliation Commissions of Canada：TRC）の方針に基づいて作成されている。40人定員だが、今は21名が参加しており、これからもっと発展させていく。プログラムに参加する人は、職員の側が当事者の必要性を見極めて選んでいる。施設の中で他の入所者とうまくやれない入所者が、このユニットにきて落ち着くことがある。」

ヘンリー・トレイル CCC（中間処遇施設）

(1) 見学の流れ

2017年7月、各施設を見学するとともに、職員6名

に聞き取りを行った。聞き取りについては各施設のミーティング・ルームや、施設内を見学しながら話をきいた。

(2) 施設やプログラムの特色

1階には共有のキッチン、洗面所、ランドリーなどがあった。2階には入所者の個室の他、エアホッケーなどが置かれたリクリエーションルームもあり、共有スペースの家具は家庭的であった。個室は4畳くらいのスペースにベッドと机がおかれ、学生寮的な感じであった。

職員からは「施設の中のプログラムは、Good life model (Ward & Brown, 2004) に基づいて対応している。入所者は月に1回は検査をうける。CCCで生活する入所者は、昼間は外に働きに行き、夜戻ってくる。刑務所と違って職員は武装していない。入所者が逃げ出した場合は、警察を呼んで対応してもらおう」と説明があった。施設の庭には小規模な畑が1つあり、収穫された作物はフードバンクに寄付されている。

(3) 施設と地域との関わり

ボランティア ボランティアは大学生が中心だが、その他にリタイア後の人も多く、みな近隣に住む人だと説明があった。また職員から以下の説明があった。「ボランティア希望者は多く、毎日申し込みの電話がかかってくる。ボランティアの条件は『18歳以上でやる気がある人。1、2年はかかわれる人』で、希望者には履歴書を提出してもらおう。その際、自分に犯罪歴がないこと（あるいは犯罪をしてから時間がたっていること）を証明する書類を自分で60ドルかけて警察で入手し、添付しなければならない。お金を払ってでもやりたい人だけがボランティアに申し込み形になっている。学生は近隣の大学の学生がほとんどで、矯正の仕事に就きたい人が募集してくる。書類選考、面接、説明会などを経て職員がスクリーニングを行う。」学生ボランティアが多いことについて職員からは「入所者の中にはこれまでロールモデルがいなかった人が多いので、人生の先輩（年配者）にももっときてほしい」との意見が聞かれた。

(4) 文化的多様性への配慮

昨年は入所者のうち27%が先住民だったとの説明をうけた。これについて職員は、「オンタリオ州における先住民の割合は14%であることを考えると高い数値である。入所者が刑務所の中で学んだことを実際の社会の中で実行していく場がCCCである」と話した。

チリワック CCC (中間処遇施設)

(1) 見学の流れ

2017年7月、施設を見学するとともに、会議室および施設内を見学しながら職員3名に聞き取りを行った。

(2) 施設やプログラムの特色

当施設は住宅街の中にある。すぐ近くには製材所があり、そこで入所者の一部がワークリリースの形式で働いていた。職員からは以下の説明があった。「精神科ナースが月曜から金曜まで常勤でいる。ここにいる人の70%は、サブスタンス・アブ्यूズ (substance abuse 薬物使用で問題を抱えている) である。当施設があるフレイザー・バリー地区全体でいうと、およそ300人がパロール下にある。そのうち60人は民間の中間処遇施設か CCC に、残りは自分の家にいる。民間施設はハイリスクの人を拒否できるため、結果として連邦が運営する CCC にハイリスクの人が集まる形になっている。現在ここには31人がいて常に満室である。先住民の入所者はいつも3〜5人くらいである。施設には、主として施設内での処遇プランやリスクアセスメントを行うパロール・オフィサーと、施設外での行動のモニターや社会復帰の支援を行うパロール・オフィサーがいて、監督の役割を分担している。」

ワークリリース キッチンでは、ミッション刑務所 (ミニナム施設) の入所者がワークリリースで働いていた。メニューはこの人たちが考えているとのことであった。またミッション・ミニナムからは、庭の手入れにワークリリースで来ている男性もいた。

(3) 施設と地域との関わり

ボランティア ボランティアは性別・年齢、様々であり、仕事としては、入所者が外部の病院に行く時に車で送っていくことや、民族文化や宗教的なことがらに関わる手伝いなどがあると説明があった。職員からは「私たちはボランティアなしにはやっていけない。ボランティアは施設の中で様々な経験をして、それを周囲 (地域の人) に伝えてくれる。その力は大きい」との話があった。

可視化の試み 職員から以下のような話が出された。「オープンハウス (施設見学会) を2〜3年に1回やっている。ふだんはそれほど参加者は多くないが、ここで新しい施設をオープンした際のタウンミーティングでは、40〜50人が参加し、施設に直接的には関係がない一般市民も多く聞きに来た。当施設は、外に開かれていること、可視化されていることを心がけている。施設のツイッターアカウントもあるし、仮釈放委員会の決定も公開されている。担当職員は、頻繁に市長と会合を持ち、新しく入所することになった人について、そして今施設に誰が入っているかを常に報告している。可視化は、政府がリベラルになってからより進んだ経緯がある。」

(4) 文化的多様性への配慮

先住民への配慮 職員の説明の概要は以下の通りである。「当施設にはいつも3〜5人の先住民入所者がい

る。彼らは施設の中で色々なハンディクラフトを作って寄付するなど、社会に何かを還元する試みをしている。先住民の入所者の多くは、自分たちの文化に基づいたカウンセリングを必要としている。CSCは、伝統的な価値と再びつながることによって彼らのヒーリングが進むと考え、様々な試みを行なってきた。しかし、今のところはまだ目に見える変化（先住民入所者の比

率の低下など）は現れていない。その理由は、施設から地域へ支援をつなぐ、その連携・継続が十分ではないためと考えている。先住民には、行政のシステム自体への不信が根強い。施設の中で信頼関係が築けたとしても、担当機関が変わってしまったり、出所したり別の施設に行ったりすると、関係が変わってしまう。だからこそ、継続性が大切で、同じ人が関わられるよう

表1 各施設の現状

施設名	施設と地域の連携の現状		
	活動しているボランティアの数	ボランティアの活動例	地域との連携の事例
コリンズ・ベイ刑務所 (Collins Bay Institution)	113人	農作業支援やブック・クラブのファシリテーターとしての参加など。ブック・クラブについては、外部団体がファシリテーターの教育やスクリーニングを行っている。 市民諮問委員会 (CAC) が施設運営を監査し、地域の意見として施設に提言する。	
ミッション刑務所 (Mission Institution)	168人 (ミディアム施設とミニマム施設両方にかかわっている人が多い。ミディアムだけの人は23人、ミニマムの人だけは82人)	農作業の指導など。	プロダクションガーデンを運営し、地域のスクール・バンクに生鮮食料を寄付する。 家具や寝具を作成し、ホームレスや学校に寄付する。
フレイザー・バリー女子刑務所 (Fraser Valley Institution for Women)	約200人	受刑者の地域への送り迎え、ブック・クラブの参加、アクティビティの提供、話し相手など。	ブランケットを作りホームレス用に寄付をする。 犬舎で、地域の顧客にサービスを提供する (犬用ホテル、犬用美容室、訓練)。
トロント・サウス・ディテンション・センター (TSDC : Toronto South Detention Centre)	約240人	受刑者にとって共感できる、実践的なプログラムにボランティアが参加している。ボランティアが受刑者のロールモデルになることが多々ある。 市民諮問委員会 (CAB) が矯正施設の運営のすべての側面について、行政に対して助言と勧告を行い、報告書を提出する。	施設が外部 NPO と提携して、高校卒業認定資格取得の支援や、オンラインでの大学授業参加ができるようにしている。 公共図書館と連携して図書室を充実。
ヘンリー・トレイル CCC (Henly Trail Community Correctional Centre)	99人	近隣の大学の学生がボランティアとして多く参加している。学生たちのキャリア形成にもつながる。 年配の人のボランティアは、人生の先輩として、受刑者のロールモデルになっている。	畑でとれた作物をフードバンクに寄付。
チリワック CCC (Chilliwack Community Correctional Centre)	約50人	入所者が外部の病院に行く時にボランティアが車で送迎。民族文化や宗教的なことがらに関わる手伝いもしている。	入所者の何人かは、昼間、ワークリリースで施設のすぐ近くの製材所で働いている。 近隣の刑務所の受刑者が、ワークリリースで当施設に働きにきている。

注) 空欄になっている部分は、聞き取りの中で回答が得られなかった側面や話題に出なかった部分であり、対応する活動が施設にないことを

上瀬：刑務所と地域の連携および文化的多様性への配慮

にすることが求められている。」

以上、6施設を見学し聞き取り調査を行った結果について要点をまとめたものが表1である。

考 察

刑務所と地域の連携の効果

本研究は、地域との連携によって出所者の社会的包

摂と再犯防止の取り組みがすすむカナダの矯正施設に注目し、具体的にどのような形で地域との連携が進んでいるのか、現状を知ることを第1の目的とした。この目的に沿い、連邦刑務所、オンタリオ州刑務所、および社会復帰のための中間処遇施設を見学し、関係者に聞き取り調査を行った。その結果、施設と地域の連携については、どの施設においてもボランティアや市

施設のノーマライゼーションに対する考え	地域との連携や施設の可視化に対する考え	文化的多様性への配慮		
		多文化への配慮	先住民入所者の割合	先住民入所者への配慮
punishment と reintegrate のバランスを考慮して、セキュリティレベルの低い施設では自由度の高い処遇になっている。施設中の活動を通じて、自身が社会に役立っていると感じられること、作業を通じて気持ちが安定していくことが重要。家族と宿泊できる施設がある。入所中も家族との絆を維持するために重要と考えている。	市民諮問委員 (CAC) は、施設中の様子を地域の外の人に伝える重要な役割を担っている。	2名のキリスト教チャプレン。その他各宗教に対応したチャプレンがいる。 各宗教に対応した食事や食事スタイルを提供。 英語が母語でないものに対し、英語学習プログラムを提供。	(収容定員760人中) 現在60人の先住民が入所している。	週に2回、特別プログラムを実施。季節ごとに文化に沿った儀式の実施やエルダー(宗教指導者)の訪問。儀式の際に伝統的な食事を提供。
			ミッション施設全体では、(収容定員540人中) 現在127人の先住民が入所している。	個別の文化背景を考慮したプログラムを実施。 屋外に大規模な宗教的儀式用の施設を設置。 エルダーがフルタイムで勤務。施設の外の先住民コミュニティとの連携。
処遇は、ジェンダー・プロトコルに基いて配慮している。 子供を持つ母親が入所した場合、5歳未満の乳幼児であれば施設内で育てることができる。		各宗教が共有する宗教行事用の部屋。フルタイムのチャプレンが1名。	先住民入所者はおよそ55%。	3名のエルダーがいる。 セキュリティレベルごとに、宗教儀式用のロッジがある。
職員のために、職場環境のノーマライゼーションも重要と考えている。 職員や受刑者の感覚が一般社会とずれないように、刑務所内ではボランティアの感覚が重要となる。	市民諮問委員 (CAB) を通じて矯正施設とその地域社会とのつながりを強化することにより、矯正支援に対する透明性を高め地域への説明責任を果たすことができる。	宗教活動にも多くのボランティアがかかわる。予算も特別な枠があり、文化的多様性に対応した食事の提供などに充てている。		先住民対応のスタッフが19人、ボランティアが3人。先住民が生活する、専用のユニットがある(文化慣習を安心して実践できる場の提供が目的。)
			昨年入った27%が先住民。	受刑者が刑務所の中で学んだことを、実生活で実行していく場が CCC である。
	市長と頻りに連絡をとり、収容者の様子を報告している。 オープンハウスを2～3年に1回実施。 ツイッターを利用した情報発信。 ボランティアは施設の中で様々な経験をして、それをコミュニティの人に伝えてくれる。		(収容定員31人中) 常時3～5人の先住民が入所している。	先住民の入所者が施設内で作品を手作りし、寄付する活動を行っている。社会に何かを還元する試みである。施設を出たあとも支援が継続するよう、コミュニティと連携。

示すものではない。

民諮問委員会などが社会復帰促進の担い手となり、連携が不可欠なものとして位置付けられていることがわかった。そして連携の現状を把握する中で、以下3点が関係者の間で連携の効果・意義として認識されていることが確認された。

第1に、人手の確保やプログラムの充実である。入所者定員の倍近い人数のボランティアが参加するフレイザー・バリー女子刑務所が顕著な例であるが、カナダの刑務所では積極的にボランティアの手を借りることで、施設内プログラムを充実させていた。また地域住民が個人的に申し込むボランティアだけでなく、外部のNGO等との連携も活発であった。入所者の社会復帰を支える社会団体、教育支援団体、音楽団体、地元図書館など多様な団体と刑務所の連携があり、それにより資金の確保や多様な教育プログラムの提供が可能となっていた。

第2に施設のノーマライゼーションと入所者の社会復帰促進効果である。全体として、刑務所をできるだけ一般社会の環境に近くすることが、入所者の社会復帰に重要であるとの理念が、関係者に共有されていた。家族とともに宿泊できる家族棟や、女性入所者が5歳未満の乳幼児を中で育てられる制度も、この理念と一致している。この理念の中で、ボランティアは外の社会との窓になるという大きな役割を担うものとして位置付けられている。さらに各施設の関係者からは、ボランティアが、入所者の良きロールモデルとなりうるという点も繰り返し語られた。入所者自身が施設内にあっても、外の社会とつながっていると感じられること（農作業や寄付など）が、出所後の社会復帰をスムーズにすると考えられていた。またトロント・サウス・ディテンション・センターの職員からは、施設のノーマライゼーションは、職員の精神的健康を保つためにも重要であると強調された。

第3に、矯正システムの可視化と、可視化がもたらす施設への信頼向上の効果である。対象となった複数の施設の関係者が、施設を地域の人々に可視化させることの重要性を指摘していた。可視化のためのチャンネルや機会としては、地域代表者がボランティアで行う市民諮問委員会（連邦刑務所のCAC、州刑務所のCAB）活動やその報告書公開、（ブック・クラブなどの）教育プログラムに地域ボランティアが参加すること、オープンフェアなどがあった。これらに携わった人々が中の様子や活動を他の人に広めていくことで、施設に対する正確な知識が地域の人々に届きやすくなると考えられていた。また、犬舎など地域住民対象のサービスや、フードバンクやホームレス施設への寄付などは、刑務所の中でどのような社会貢献活動がなされているのかを、具体的な形で地域住民に可視化する

ものである。このようなサービスが地域の人々に提供されることで刑務所と地域住民との繋がりが生まれ、地域における刑務所に対する信頼向上につながっているものと推察される。

これら3点について日本の状況を振り返ると、PFI刑務所などでは、民間職員が教育プログラムに参加したり一部のボランティア刑務所の教育プログラムに関わることもあり、人手の確保やプログラムの充実に貢献している。また矯正展や見学会、地域代表者と刑務所職員との関係構築、新聞や自治体の広報誌あるいは施設ホームページを通した情報発信などは各所で行われ、可視化の試みも進みつつある。ただ、一般市民が刑務所の活動に関わることを不可欠なものとして積極的に肯定し、それを可視化の入り口として位置付ける姿勢は、日本とカナダとでは大きく異なっている。そしてカナダの特徴は、施設側・市民側双方が連携の利点や重要性を認識している点にもある。チリワックCCCの職員は「私たちはボランティアなしにはやっていけない」と発言しており、コリンズ・ベイの市民諮問委員は自分の役割の一つは施設の中の様子を外の人に正確に伝えることだと述べていた。

文化的多様性への対応

本研究の第2の目的は、先住民入所者の社会復帰支援を中心に、文化的多様性に対応した具体的な運用を明らかにすることであった。見学および聞き取りの結果、文化的に多様な入所者への対応として、複数のチャプレンの提供や、食べ物の工夫などが共通して行われていた。さらに教育プログラムとして、英語が母語でない入所者に他の入所者がアシスタントとして学びの指導する工夫や、外部の組織と協力した高校卒業単位取得のための教育支援も行われていた。文化的多様性への配慮は、施設内処遇の側面にとどまらず、出所後の生活を向上するための教育プログラムについても考慮されていることが明らかとなった。

特にカナダ特有の問題である先住民入所者の社会復帰支援のあり方については、固有の文化に配慮した教育が行われていた。聞き取りの際には、帰る地元を失った先住民の社会復帰や社会的包摂の促進に、入所中に形成された支援者との信頼関係を出所後も継続することや、出所の際に地域社会へスムーズに復帰するための橋渡しが重要であることが繰り返し語られた。そのために、カナダ連邦刑務所では、地域との連携をスムーズにすることを任務にする、固有の文化・社会に精通する職員を配置している。

「固有の文化をもつ入所者に対しては、社会復帰のためにより細かな対応をしていく」という姿勢は、多様性への配慮が求められる日本の施設において、今後、

より重要になっていくと考える。そして出所後の再犯防止を考える際にも、戻っていく地域と刑務所との連携をどのように形づくっていくのかについて、固有の文化への復帰という側面から効果的なあり方を考えていくことが必要となる。

接触の機会と偏見の低減

上瀬ら（2016）は、PFI刑務所開設地域の住民調査を分析し、近隣住民が直接的・間接的に施設に接触することが出所者に対する偏見を低減させることにつながっていたと指摘した。彼らは社会心理学における接触仮説理論（Allport 1954）に基づいて、接触による偏見低減プロセスを分析している。ここまで示したように、カナダでは刑務所と地域が連携することで、結果として、市民が矯正システムに直接的・間接的に接触する機会が多く提供されていた。個人的なボランティア、NPO組織を介したボランティア、市民諮問委員会などは、市民が刑務所という場や入所者たちに直接的に接触する機会となっている。また犬舎などの地域住民対象のサービスや、ワーク・リリースの場も、入所者と一般市民が直接的に接触する機会を提供している。また、間接的接触の機会としても、市民諮問委員会が作成した報告書を読む、刑務所で作った農作物等をフードバンクから受け取る、刑務所と連携する各種NPO発信した情報を受け取るなど、様々な形が存在していた。

日本では現在、再犯防止の促進について国・地方・地域がどのように連携していくのかを考える過程に入っている。カナダの例が示すように、地域との連携は接触の機会を大きく増加させる。日本とカナダの文化的背景やシステムは異なるため、接触のあり方については日本のシステムに合致したものを検討していく必要がある。ただし前述のようにカナダにおける連携のチャンネルは既に日本にもあるものも多く、それらを積極的に活用することで接触の機会を増加させ、これらの接触が施設や出所者に対するステレオタイプや偏見を肯定的に変化していくものと考えられる。

本研究の問題点と今後の課題

本研究ではカナダの刑務所と地域の連携の現状をもとに、連携の効果を論考した。ただし見学できた施設は全体から見ればごく一部であり、特に州刑務所のあり方は州によって異なるため、本報告の内容は限定されたものであることを述べておきたい。また本研究で聞き取りを行なった対象は職員を始めた施設関係者であり、カナダ矯正施設に対するカナダ社会全体の態度を把握したものではない。このため本研究で示された地域との連携の現状やその効果に対する論考については、さらに多くの施設の状況を調査することが必

要である。また刑務所との連携に対する地域住民の意識については、住民調査を広く行なうなどして偏りのない意見を収集するとともに、接触の効果については量的な指標を用いて確認することが求められる。

引用文献

- Allport, G. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- 浅井 晃 (2004). 『カナダ先住民の世界』 彩流社.
- Correctional Service Canada (2015). *Offender Education Programs and Services*. (2019年3月1日取得, <http://www.csc-scc.gc.ca/publications/005007-2014-eng.shtml>)
- Correctional Service Canada (2017). *CSC Statistics – Key facts and figures*. (2019年3月1日取得, <http://www.csc-scc.gc.ca/publications/005007-3024-eng.shtml>)
- Correctional Service Canada (2018). *Staff Protocol in Women Offender Institutions*. (2019年3月1日取得, <http://www.csc-scc.gc.ca/lois-et-reglements/577-cd-eng.shtml>)
- Gottschall, S. (2012). *Ethnic Diversity in Canadian Federal Offender Admissions*. Research Report, R-263. Ottawa, Ontario: Correctional Service of Canada.
- Heathcote, I.W. (2015). *Book clubs at the big house: The story of book clubs for inmates—Changing lives, one book at a time*. Wyndham Research Press.
- 法務総合研究所（編）（2017）. 『平成29年度版犯罪白書』 法務省.
- 法務総合研究所（2014）. 『外国人犯罪に関する研究 研究部報告』, 53. (2019年3月1日取得, http://www.moj.go.jp/housouken/housouken03_00079.html)
- 上瀬由美子 (2019). 『矯正施設と地域の連携による社会的包摂促進：刑務所開設の影響に関する既存研究、およびカナダ連邦刑務所のシステムから考える』 立正大学心理学研究所紀要, 17, 51-65.
- 上瀬由美子・高橋尚也・矢野恵美 (2016). 『官民協働刑務所開設による社会的包摂促進の検討』 心理学研究, 87, 579-589.
- 西田 博, (2012). 『新しい刑務所の形——未来を切り拓くPFI刑務所の挑戦——』 小学館集英社プロダクション.
- Statistics Canada (2017). *Immigration and ethnocultural diversity: Key results from the 2016 Census*. (2019年3月1日取得,

- <https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/171025/dq171025b-eng.htm>
 Statistics Canada (2018). *Adult and youth correctional statistics in Canada*, 2016/2017. (2019年3月1日取得,
<https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/85-002-x/2018001/article/54972-eng.htm>)
 Toronto South Detention Centre (2017). *Community Advisory Boards*.
https://www.mcscs.jus.gov.on.ca/english/corr_serv/CABs/CABs.html
 Walmsle, A. (2015). *The prison book Club*, Random House Canada. (=2016向井和美訳『プリズン・ブック・クラブ——コリンズ・ベイ刑務所読書会の一年』紀伊國屋書店.)
 Ward, T., & Brown, M. (2004). The good lives model and conceptual issues in offender rehabilitation. *Psychology, Crime & Law*, 10, 243-257.

注

- 1) 本稿は科研費17K04329 (基盤C) 『「可視化した社会システム」導入による「接触」促進と社会的包摂過程の検証』の一環として行った。また、本研究結果の一部は、日本応用心理学会第86回大会で発表されている (上瀬由美子 (2019), 刑務所と地域の連携: カナダ連邦・州刑務所の地域連携事例の報告)。
- 2) 本調査の実施にあたって、Brian Low 氏 (Brian Low & Associates)、森田裕一郎氏 (法務省矯正局)、大塚敦子氏、Correctional Service Canada 関係者の皆さま、Toronto South Detention Centre 関係者の皆さまに、多大なご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。
- 3) カナダ連邦矯正局 (Correctional Service of Canada) のポリシーに関する文書では、刑務所の外に続く社会を広くコミュニティ (community) と表現している。英語の community という言葉には対象との関係性をもふまえた広い意味を含んだものであり、日本語の「地域」のように必ずしも場所を特定するものではない。ただし本研究は、近隣住民が参加するボランティア活動や近隣住民の代表としての市民諮問委員の活動に注目して現状を紹介するものであり、聞き取りの際に対象者が用いた「コミュニティ」という言葉は、日本語の「地域」に近いものであった。このため、本稿では以下、聞き取り対象者が用いた community という言葉を「地域」と表現した。
- 4) カナダの刑務所施設は大きく、マキシマム、ミディアム、ミニマムの3つのセキュリティレベルが設定され、警備のあり方や入所者の生活の仕方はこの3つの間で大きく異なっている。逃走のリスクと社会にとっての危険度が高いと考えられる入所者が収容されている施設がマキシマム・レベル、逆にリスクが最も低いと考えられる入所者が収容されている施設がミニマム・レベルである。
- 5) カナダの刑務所では、入所者は刑期が残り1/3になると一部の例外を除き義務的に仮釈放に進み、パロール (保護観察) 下で、コミュニティで残りの刑期を過ごすことになる。この際に利用される居住施設として、コミュニティを基盤とした居住施設があり、刑務所とコミュニティの橋渡しを行うための存在となっている。この居住施設は、非政府機関が所有・運営する施設 Community Residential Facility CRF) と、CSC が所有・運営する Community Correctional Centre (以下、CCC) に大別される。

要約

カナダでは、出所者の社会的統合の促進を念頭に、刑務所と地域との連携が進んでいる。また同時に、多文化社会を背景にして民族文化的に多様な入所者への合理的配慮も進められている。本研究では、カナダ矯正局管轄の5施設 (刑務所および中間処遇施設) とオンタリオ州刑務所1施設を見学し、カナダにおける刑務所と地域との連携および文化的多様性に対する取り組みの現状について関係者の聞き取り調査を行った。この調査結果をもとに刑務所と地域の連携の効果として、「人手の確保やプログラムの充実」「施設のノーマライゼーションと入所者の社会復帰促進」「矯正システムの可視化による、地域における施設への信頼向上」の3点を指摘した。また固有の民族文化をもつ入所者の社会復帰促進に関して、出所の際の地域社会への引き継ぎの重要性が強調されていることも明らかになり、日本でも今後検討すべき事柄として位置付けられた。本稿の最後では、刑務所と地域の連携の重要性を、社会心理学における接触仮説の視点から論考した。

キーワード：再犯防止、社会的包摂と再統合、接触仮説理論